

おおぞら

No.31 (148)

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2012年2月1日

うたうコミュニケーション

所長 横地 健治

重症心身障害児(者)の生活のなかで、どんなことを行い、どんな経験をしたら価値があるかを決めるのは難しいことです。その時参考になるのは、有意な言語理解・表出のない1歳未満の健常児、乳児です。乳児がどんな精神世界の中にあるのかは発達心理学の大きなテーマです。最近、このテーマの著作「ことばの前のことば」(やまだようこ著、1987年)を読み、感銘を受けました。

著者やまだは、乳児の世界には、ふたつの根本的に異なった関係性があると考えました。ひとつは、物との関係で「みる」と「関係」、もうひとつは、人との関係で「みる」と「関係」としました。やまだは、「みる」と「関係」に先行する「みる」と「関係」の重要性を強調しています。これに対し、発達心理学の始祖であるピアジェは、こうした意義を認めていません。新生児期・乳児期早期には、母は我が子を見つめ、語りかけようとする振る舞いをします。

語りかけても、ことばとしての意味はありません。こどもは語りかけられる意味は理解できませんが、それに同調して、身体を動かし、表情は変化させ、声を出したりします。こうした母子の交流をエンタインメント(entrainment)と呼んでいます。この語は、「惹きこみ」と訳されていますが、「共鳴」または「同調」という訳が適しているかもしれません。これをやまだは「うたうコミュニケーション」と呼んでいます。

その後、外の世界を「みる」ことは「とる」こととつながります。その後、「指さし」がみられるようになります。我が子に見られた初めての「指さし」は、「あっ、あそこにあんなものが!」と自分の感動を母に伝えるものであったとして、やまだは注目しています。この指さしは、物との関係(「みる」と「とる」と人の交流(「みる」と「うたう」)が結合したものと考えています(これを「三項関係」の形とも言います)。これをもっ

て、他者(人)に何か(物)を伝える関係が創られたとします。このように、「ことば」は、人と物との関係だけで生まれるのではなく、人との交流が深まらなければ生まれえないものだと、やまだは考えています。

この「うたう」関係は、「ことばの前」の世界にいる重症心身障害児(者)にも当てはめられると私は思います。普通なことばが生まれる年齢を過ぎてても、有意な言語理解・表出がみられないならば、なお、「ことばの前」の状態は続いています。そのため、「ことばの前のことば」である「うたうコミュニケーション」の意義はなくなっていないと考えます。外界にある物の意味とは関わりなく、他者と共感・共鳴する関係はなければならぬということですが、こうした関係を持つのは、最初は母親です。しかし、施設入所者では、施設職員が「うたう」関係を持つ人の役目を負うこととなります。こうした関係を経て、外界の理解を深めてもらいたいと考えています。

やまだの著作を読んで、もうひとつ感銘を受けた点は、

以上の卓越した理論を、やまだは我が子の育児記録から築き上げたということですが、たつたひとりの対象を詳細に観察することによって、ピアジェのような権威に反する優れた見識を得たことになりました(理はやまだにあると私は思います)。私は「学は現場から生まれる」と信じる現場主義者です。私からすれば、やまだこそ究極の現場主義者です。すべての母親が経験する育児の現場から学を作り上げています。やまだ自身もこれを自覚し、この立場を「モデル構成的現場心理学」と名付け、その利点と限界を著作の中で述べています。大集団の中から共通する法則性を見出すのではなく、少数例の個別的な現象や出来事の組み合わせを分析し、その基礎にある普遍を探る道が現場主義です。私たち施設職員は、こうした立場に立ち、個々の重症心身障害児(者)の関わりの経験から学び、その精神世界を深く理解し、その最良の人生を提案し続けていかなければならないと思っています。

